

## 学位論文要約

論文題名：速度考を中心としたバークリー哲学の再解釈

尾崎 有紀

本論の目的は、ジョージ・バークリー（George Berkeley, 1685-1753）によって展開された哲学を、物理学の現代的な問題を捉える新たな視点を備えた哲学として、再解釈することである。

物理学的な観点からは、バークリー哲学は、ふつう、マッハ哲学の先駆と位置付けられる。マッハ哲学が現代物理学の視点から注目されること、また、バークリー哲学がそのマッハ哲学の先駆的な内容を含むとしてしばしば評価されることは、よく知られる通りである。にもかかわらず、バークリー哲学を再び取り上げることは、次の理由から有益であると思われる。まず、バークリー哲学が、物理学の捉え方を考える上で重要と思われる、マッハ哲学とは異なる視点を備えていると思われること。また、このオリジナルな視点が、物理学上の実際の問題について、マッハ哲学と異なる展開を可能とする視点と考えられることである。本論では、バークリー哲学の再解釈に基づいてこの二点を論じることで、バークリー哲学の物理学的な再評価のための一つの材料を与える。一般に、物理学的な観点からのバークリー哲学の評価は、マッハ哲学の先駆としての評価にとどまっており、これまで、バークリー哲学を物理学の現代的な問題と結びつける議論や、バークリー哲学に基づいた新たな展開を試みる議論などは、ほとんどなされていない。

本論は、バークリー哲学の再解釈を、速度概念の構成という哲学的問題を中心に試みる。物理学の哲学として、バークリー哲学との共通点が指摘されるマッハは、時間間隔と空間的距離の比によって定義される速度概念のかわりに、空間的距離と空間的距離の比によって定義される速度概念を提示する。また、現代の論者では、マッハの哲学的主張を一部受け継いで物理学の再構築を試みる物理学者バーバー（Julian Barbour, 1937-）によって、マッハと同様の時間間隔の概念を含まない速度概念が提示されている。マッハやバーバーらによって、時間間隔の概念を含まない速度概念が提示される重要な動機は、このような速度概念の構成が、時間間隔の定義という哲学的問題に対する一つの回答となっていると考えられることである。本論は、このような、マッハとバーバーによって提示される、空間的距離と空間的距離の比によって定義される速度概念の構成が、バークリー哲学においても論じられることをみるという速度考を中心として、バークリー哲学の再解釈を論じる。

本論は、バークリー哲学における速度概念の構成という問題を、概念構成という哲学的問題の枠組みの中で、感覚からの論理的構成 (logical construction from sense-data) というアプローチを採って論じる。概念の感覚からの論理的構成とは、論理的な道具立てによって、例えば「物」や「場所」などの人間の知識の基本的概念を、感覚から定義ないし定式化していく試み、またこのプロセスを示す試みである。本論におけるバークリー哲学に基づく概念構成の議論の一部は、バークリーの主張を集合論の記号で述べ、形式的に再構成する試みでもある。少なくとも概念構成という主題に関係する限りにおいて、バークリー哲学は次の二つの独自の視点をもつと考えられる。ひとつめの視点は、感覚すなわち認識者の側の認識機能による加工を受けていない生のデータの「質 (quality)」の区別を、概念構成を考える際に保ち続けるという視点である。バークリー哲学にこの視点があることが、バークリー哲学に基づいて「物」や「場所」などの人間の知識の基本的概念に従来の定義を与えることを可能にしていると思われる。本論で行うデータの質を考慮に入れた概念構成の考察は、データの質の区別を保ち続けるという視点を含むバークリー哲学を研究の対象とすることによってはじめて可能であるといえる。ふたつめの視点は、時間的および空間的概念の構成において、「無意識的な (unconscious)」構成を認め「ない」という視点である。例えば、デカルトなどによるバークリーの同時代の理論だけでなく、マッハの理論、また現代の脳科学においてもそう想定されるように、いわゆる「奥行き」がある意味において無意識的に構成されるという捉え方に対して、バークリーは一貫して反対の立場を採る。このような、多くの立場の論者によって与件とされたり無意識的に構成されるとされる概念を、自覚的に構成される概念と捉えるバークリー哲学から、従来の概念構成のシナリオを引き出すことが可能である。これらの独自の視点と関連して、共通感覚や個物概念 (すなわち「これ」や「あれ」などの指示詞) の構成についても、独自の捉え方が与えられる。

本論の最後で、概念構成という哲学的主題の物理学的な応用の例として、ローレンツ収縮 (Lorentz contraction) の経験的内容の問題を論じ、概念構成という哲学的問題を、いかに物理学的応用の議論につなげるか検討する。また、このローレンツ収縮の経験的内容の問題の、現代物理学における重要性についての素描を試みる。